

趣意書

「八月十五日と南原繁を語る会」実行委員会
(代表 立花隆・佐々木毅・石井紫郎)

一九四五年八月十五日は、大日本帝国と帝国大学（旧制東京大学）が滅びた日だった。

一九四五年暮れから一九五一年まで、南原繁は東京大学総長の座にあった。

その間に、どん底状態にあった日本はなんとか再起を果たし、復興をとげるための大いなる歩みをはじめた。旧制東京大学は新制東京大学に生まれ変わり、大日本帝国は民主主義国家に生まれ変わった。

この間ずっと、南原総長は、一連の演述を通して、茫然自失状態にあった日本国民を鼓舞し続けた。国家を再生させるために、いま何をなすべきかを訴え続け、指針を出し続けた。

八月十五日が、国家が死んだ日であったとすれば、南原総長時代は、国家が再生していく日々だった。

あらゆる意味で、いまここにある日本は、その延長の上に築かれた日本である。

南原繁はいわば、戦後日本の礎石を置いた人である。

政治学者にして政治哲学者であった南原は、国家のあり方をあらゆる角度から考え、透徹した思考から生まれる知恵を、国民に供しつづけた。

一方で南原繁は、憲法をはじめとする一連の仕組みが、いずれ歴史の試練に直面するであろうことを予見していた。戦後六十一年を経て、いま日本で、憲法改正（内容形式はさまざま）を求める人々が徐々に多数を形成しつつある。

しかし憲法改正をすべきかどうか、そしてその方向性をめぐっては、いまだ激しい議論がつづき、一定方向に収束しつつあるとはいえない。

いまこそ、戦後日本を再出発させようとした時点で、南原繁がどう考え、どう発言していたかに、もう一度思いをはせるべきときであるように思う。

その上で、日本のこれまでをどう総括し、日本のこれからをどう構想するのか、しばし熟考をこらすべき時であるように思える。

南原繁が力をつくしたのは、アカデミック・フリーダム（学問の自由）の確立だった。帝国日本と帝国大学の衰亡が、アカデミック・フリーダムが失われることからはじまったことを、南原は身をもって知っていたからだだった。

アカデミック・フリーダムを守りつづけるためになすべきことは何か。

学知によって、広く、深く、遠くを見ることを学び、真理が命じることがままに、常に言うべきことを言いつづける勇氣を持つことである。

為政者から曲学阿世と罵られつつ、発言を止めなかった南原繁こそ、アカデミック・フリーダムの偉大な実践者だった。

南原繁の衣鉢を継いで、日本の歴史について、日本の現在と未来について、広く、深く、遠くを見る見地から、いま言うべきことを言っておこうとする者がここに集っている。